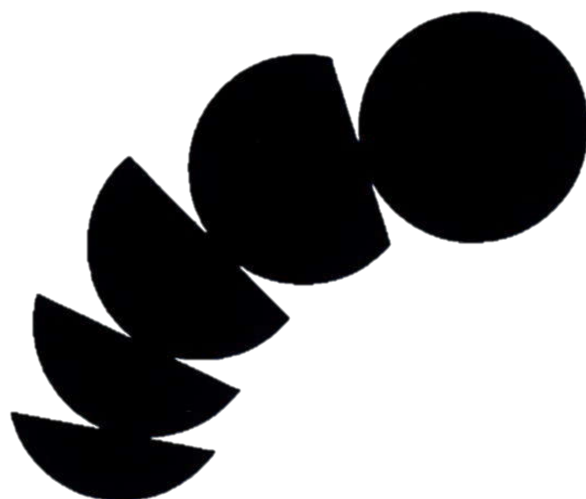


第 34 回テニス学会

The 34th CONFERENCE OF TENNIS SCIENCE

期 日 令和 4 年 10 月 22 日 (土) ~10 月 23 日 (日)

会 場 北翔大学



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

主 催 日本テニス学会

後 援 北翔大学

協 力 橘図書教材

東海学園大学

株式会社文成印刷

株式会社ダンロップスポーツマーケティング

ヨネックス株式会社

株式会社サン・ワイズ

目次

大会日程	3
北翔大学への交通アクセスとキャンパスマップ	4
参加される方へお知らせ	5
発表者の方へのお知らせ	7
大会プログラム	9
学会企画（講演1・講演2）	14
一般研究発表（ポスター発表）	19
一般研究発表（口頭発表）	24
一般研究発表（オンコート発表）	32
企画プログラム開催履歴	34
テニス大会歴代優勝者	39
研究奨励賞歴代受賞者	42

大会日程

10月21日(金)

16:00-18:00 運営委員会 北翔大学

10月22日(土)

9:00 - 受付開始 北方圏生涯スポーツ研究センターエントランス
9:45 - 9:55 開会挨拶 北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室 (6F)
10:00-11:00 講演1 北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室 (6F)
11:10-12:10 講演2 北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室 (6F)
12:10-13:00 ランチブレイク
13:00-14:00 講演2(オンコート) 北方圏生涯スポーツ研究センター第三体育館 (3F)
14:10-14:35 一般研究(ポスター) 北方圏生涯スポーツ研究センタートレーニングジム2(2F)
14:45-15:45 一般研究(口頭発表①) 北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室 (6F)
15:50-16:50 一般研究(口頭発表②) 北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室 (6F)
16:50-17:20 総会 北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室 (6F)

10月23日(日)

9:00 - 受付開始 北方圏生涯スポーツ研究センターエントランス
9:30-10:45 一般研究(口頭発表③) 北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室 (6F)
10:55-11:10 一般研究(オンコート) 北方圏生涯スポーツ研究センター第三体育館(3F)
11:20-12:20 テニス大会(※) テニスコート
12:30-12:35 表彰式 テニスコート
12:35-12:40 閉会挨拶 テニスコート

※雨天の場合

- ・テニス大会は中止になります。
- ・シンポジウム, 一般研究発表, 北方圏生涯スポーツ研究センターにて実施します。北方圏生涯スポーツ研究センターは土足厳禁です。室内シューズをご用意ください。

北翔大学への交通アクセスとキャンパスマップ

◆住所：〒069-8511 北海道江別市文京台 23 番地

◆アクセス：

詳細は、<https://www.hokusho-u.ac.jp/accessguide/>をご覧ください。



配置図

参加される方へのお知らせ

1. 学会大会参加の申込み

今大会への参加は、事前申込み制になっています、また、学会大会期間中の当日参加申込みも可能です。

《学会大会参加費》

事前申込み	正会員：5,000 円 非会員：7,000 円	学生正会員：3,000 円 非会員学生：5,000 円
当日申込み	正会員：6,000 円 非会員：8,000 円	学生正会員：4,000 円 非会員学生：6,000 円
テニス大会（小山秀哉杯）参加費	無 料	

2. 受付

大会 1 日目：10 月 22 日（土） 9:00 受付開始 於：北翔大学	学会大会参加事前申込みの方、ならび学会大会・懇親会当日参加申込みの受付を行います。また、テニス大会（小山秀哉杯）への参加受付を行います。
大会 2 日目：10 月 23 日（日） 9:00 受付開始 於：北翔大学	学会大会参加事前申込みの方、ならび学会大会当日参加申込みの受付を行います。また、テニス大会（小山秀哉杯）への参加受付を行います。

当日参加申込みの方は、受付時に、参加費等のお支払いをお願い致します。当日、日本テニス学会に入会された方は、会員参加費にてご参加いただけます。大会参加事前申込みをされた方は、出席をお届けください。また受付にて全員の方に名札をお渡ししますので、お名前をご記入の上、見やすいところにお付けください。

3. テニス大会（小山秀哉杯）

10/23（日）に学会員の交流と親睦を中心としてダブルスを中心にテニス大会を開催します。上位入賞者には景品を用意しております。開始時刻までにテニスコートにお集まりください。テニスコートはアウトドアで、サーフェスはオムニコートです。なお、試合参加中に気分が悪くなった場合は、早急にお近くのスタッフにお伝えください。また、大会中に発生した事故および傷害につきましては自己責任とさせていただきます。休息や水分補給などは各自こまめにお取りください。

※雨天の場合、テニス大会は中止となります。

4. 昼食

昼食は各自でご準備ください。

5. 宿泊

宿泊は各自でご予約ください。

6. 公認指導者更新のための研修ポイント

学会に参加されますと日本テニス協会「公認指導者更新のための研修ポイント」、日本プロテニス協会「JPTAポイント」が付与される予定です（現在申請中）。ポイント付与をご希望の方は受付時に「研修・実習活動実績証」（日本テニス協会）カードをご提出ください。カード返却は、提出日の夕方となります。プロテニス協会のポイント付与は受付時に会員番号・氏名・所属を記入して頂き、学会からプロテニス協会に申請を行います。また、個人からプロテニス協会に申請して頂くことも可能です。

7. 研究奨励賞

研究奨励賞は、テニス学会において優れた研究発表を行った若手研究者・指導者に、今後さらにその大成を期し、研究・指導振興の一助となることを目的として設置されたものです。選考対象は、第34回テニス学会一般研究発表者のうち、年齢が35歳以下の発表者です。運営委員による選考を行い、受賞者には表彰状と金一封の進呈があります。表彰式で授与を行います。

<学会大会に関するお問い合わせ>

第34回日本テニス学会大会事務局

北翔大学 黒田 裕太

〒069-8511 北海道江別市文京台 23 番地

TEL : 011-387-3929

E-mail: conf-34@jsts.cc

発表者の方へのお知らせ

◆口頭発表

- ・「口頭発表」は、**発表 10 分、質疑 5 分の計 15 分**でお願いします。進行は座長に一任ください。テニス学会は創立当初から、「現場と研究のギャップを埋める」というコンセプトを掲げてきました。「研究結果を現場で活用できるように心がけよう、提言を行おう」という思いがあったのですが、実際には、「有意差が出なかった」「データ数が少なかった」「ここまで言ったら拡大解釈と言われる恐れがある」等の理由から、現場に向けた具体的なメッセージを発信するには至らないケースも多かったと思います。そこで本大会は、データや事例に直接的に基づく「結果」「考察」とは別に、スライドの最後に「現場への提言」（名称はこの通りでなくても構いません）という 1 枚もしくは数枚を作ってください、「現場でこのように応用できるかもしれない」という発表者の方の思いを自由に発信していただきたいと思います。座長にもあらかじめこの点を理解していただいておりますので、安心して提言を行ってください。実りある学会大会にするためにご協力をお願いいたします。
- ・配布資料がある場合は 100 部準備してください。配布資料には、演題名、演者氏名、所属を明記してください。
- ・口頭発表では、学会事務局の用意する共用 PC（Windows PC）での発表、もしくは持込 PC での発表をお選びいただけます。受付時にどちらで発表されるかをお伝えください。

✓共用 PC を使った場合の注意

- ・発表セッション開始の 1 時間以上前（口頭発表①②で発表される方は 9:30 頃を目処に作業を完了してください）までに各発表会場にてスライド（Microsoft Office Power Point ファイル）をご提出ください。データの受付作業はスタッフが行いますが、小さい修正であればその場での修正が可能です。
- ・動画や共用 PC にデフォルトでインストールされていないソフトウェアを使用する場合は持込 PC での発表をおすすめします。
- ・発表データを作成する際、使用するフォントは Windows 標準のものをご使用ください。特殊なフォントを使用すると文字ズレやレイアウト崩れの原因となります。
- ・動画は発表データと合わせてフォルダにまとめてから Power Point に埋め込みを行ってください。
- ・Microsoft Office Power Point 2019 がインストールされた PC を準備しております。

✓持込 PC を使った場合の注意

- ・受付時、持込 PC にて発表する旨を受付へお伝えください。
- ・持込 PC を使用して発表される場合、パソコンの映像出力端子は HDMI もしくは VGA（15pin）となります。最近の薄型 PC にはこの端子が付いていないことも多く、変換ケーブルが必要になる場合があります。その場合は必ず必要なケーブルをご持参ください。事務局でご用意いたしかねます。万が一動作しない場合に共用 PC をお使いいただくことができます。前項目の“共用 PC を使った場合の注意”をご覧ください。共用 PC でも動作可能な準備をお願いします。

- ・プログラムをご確認いただき、ご自身の前の発表者が発表を始めた段階で持込 PC（必要なケーブルを含む）を会場前方にあります「次演者席」前方の PC ブースにご提出ください。前の発表者の発表が終了した段階でディスプレイ画面の切り替え作業を行います。口頭発表のスムーズな進行にご協力ください。

※Apple 社製 PC では変換コネクタが必要です。HDMI や VGA のアダプターを必ずご持参ください。

※タブレット端末による発表はできません。

※持込 PC の場合、スクリーンセーバーや省電力設定、通知設定はあらかじめ解除しておいてください。解除されておりませんと発表中にこれらが作動し、進行に影響する可能性があります。

※作成いただいたデータは他の PC で読み取れない可能性があります。他の PC でも起動するかどうかをあらかじめ確認ください。

■オンコート発表

- ・オンコート発表の発表時間は、**発表 10 分、質疑応答 5 分の合計 15 分**です。発表時間には準備などが含まれます。また参加体験型の発表を希望される発表者およびオーディエンス用にテニスシューズおよびテニスラケットの貸出を行います。参加を希望される方はオンコート発表会場のスタッフへお申し出ください。ボールおよび 1-2 名の学生スタッフは大会事務局で準備することが可能ですので事前に第 34 回テニス学会事務局へご連絡ください。

- ・オンコート発表の会場は北方圏生涯スポーツ研究センター第 3 体育館にて実施します。室内ジュースをご用意ください。

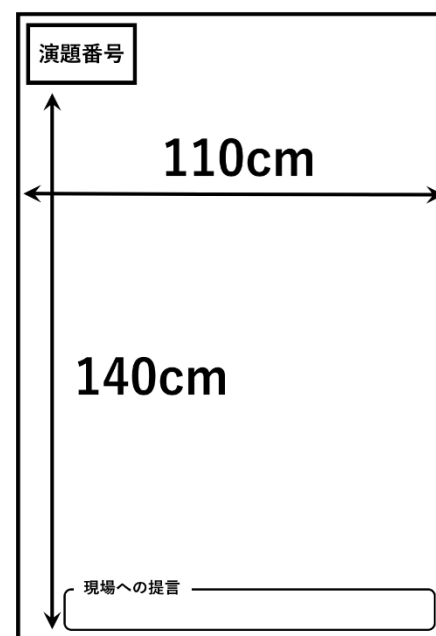
■ポスター発表

- ・本大会ではポスター発表にも座長が 1 人割り当てられ、発表者 1 人に対して**発表 3 分、質疑応答 2 分の合計 5 分を準備しています**。進行は座長に一任ください。前記「口頭発表」部分に記載しましたように、本大会では研究結果を実践の場に役立てることを重視しておりますので、ポスターの一部にも「現場への提言」を盛り込んでくださいますよう、お願いいたします（右図例を参照ください）。詳しくは前記“口頭発表”欄を参照ください。

- ・**ポスターは 10 月 22 日（土）の 9:30 までに掲示を完了してください。**

- ・演題 1 つに対して 1 枚のポスターパネルが用意されます。ポスターパネルのサイズは横 110cm×縦 140cm です。ポスター掲示用のテープは学会が準備します。左上角には大会事務局が用意する演題番号を貼付します。ポスターには、演題名、演者、共同研究者、所属を各自記載してください。

- ・**ポスターは 10 月 22 日（土）の 17:45 までに撤去願います。**所定の時間経過後に残されたポスターは、大会事務局にて処分させていただきます。



◎発表時間の厳守にご協力ください。

大会プログラム

大会前日：10月21日（金曜日）

16：00－18：00 運営委員会

北翔大学

1日目：10月22日（土曜日）

9：00－ 受付 学会大会・テニス大会

（場所：北方圏生涯スポーツ研究センターエントランス）

開会挨拶 司会：黒田裕太（北翔大学）

（場所：北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室（6F））

9：45－9：50 会長挨拶 友末亮三（テニス学会会長）

9：50－9：55 皆様へのお願い 黒田裕太（北翔大学・第34回テニス学会事務局）

講演1 司会：高橋仁大（鹿屋体育大学）

（場所：北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室（6F））

10：00－11：00

『これまでのテニス学会とこれから』

梅林薫 氏（大阪体育大学 スポーツ局 局長）

講演2 司会：村上貴聡（東京理科大学）

（場所：北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室（6F））

11：10－12：10

『テニピンがテニスのミライを創造する』

今井茂樹 氏（山梨学院短期大学 保育科 准教授）

ランチブレイク

12：10－13：00 ランチブレイク

講演2（オンコート）司会：村上俊祐（鹿屋体育大学）

（場所：北方圏生涯スポーツ研究センター第三体育館（3F））

13：00－14：00

『テニピンがテニスのミライを創造する』

今井茂樹 氏（山梨学院短期大学 保育科 准教授）

一般研究発表 ポスター発表 座長：石原暢（神戸大学）

（場所：北方圏生涯スポーツ研究センタートレーニングジム2（2F））

14：10－14：15 演題番号 P1：

「テニスのグラウンドストロークにおける試合進行とパフォーマンスの関係 ～Match simulation protocol を用いた実験的研究～」

○村田宗紀（鹿屋体育大学），内藤貴司（北海学園大学）

14：15－14：20 演題番号 P2：

「テニス・女子ダブルスのゲームパフォーマンス分析」

○高橋仁大（鹿屋体育大学），岡村修平（大阪体育大学），大澤啓亮（鹿屋体育大学），村上俊祐（鹿屋体育大学）

14：20－14：25 演題番号 P3：

「中学生ソフトテニス競技者のコーチングにおける打球速度の目標設定」

○松江拓（鹿屋体育大学大学院），前田明（鹿屋体育大学）

14：25－14：30 演題番号 P4：

「自己効力感および他者効力感の検討：一高校生女子ソフトテニス選手を対象として一」

○佐久間智央（日本大学），高橋正則（日本大学）

14：30－14：35 演題番号 P5：

「スポーツ系大学の学生が望む「受講したいテニス授業」とは」

○武田守弘（広島文化学園大学）

一般研究発表 口頭発表① 座長：小屋菜穂子（大同大学）

（場所：北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室（6F））

14：45－15：00 演題番号 O1-1：

「統計データとタグ付け動画を用いたアマチュアテニスコーチング手法」

○渡邊泰行（慶應義塾大学体育研究所）

15：00－15：15 演題番号 O1-2：

「機械学習を適用したサービスエース予測モデルの構築」

○大澤啓亮（鹿屋体育大学），村上俊祐（鹿屋体育大学），岡村修平（大阪体育大学），柏木涼吾（鹿屋体育大学），高橋仁大（鹿屋体育大学）

15：15－15：30 演題番号 O1-3：

「ウェアラブルジャイロセンサーを用いた体幹部回旋動作評価方法の提案」

○魚田尚吾（関西大学），丸谷賢弘（大阪大学大学院），川上諒（大阪大学大学院），中田研（大阪大学大学院）

15：30－15：45 演題番号 O1-4：

「模擬ゲーム中の打球データに基づく学生選手の課題の設定例」

○村上俊祐（鹿屋体育大学），大澤啓亮（鹿屋体育大学大学院），岡村修平（大阪体育大学），北村哲（びわこ成蹊スポーツ大学），高橋仁大（鹿屋体育大学）

一般研究発表 口頭発表② 座長：村田宗紀（鹿屋体育大学）

（場所：北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室（6F））

15：50－16：05 演題番号 O1-5：

「COVID-19の流行に伴うツアーの中断がプロテニスプレーヤーの試合統計に与えた影響」

○石原暢（神戸大学），Nicolas Robin（Université des Antilles），内藤貴司（北海学園大学），村田宗紀（鹿屋体育大学），Miguel Crespo（International Tennis Federation）

16：05－16：20 演題番号 O1-6：

「ストロークの速さと精度のトレードオフボール運動のばらつきとその落下位置への影響」

○須藤佑介（東京大学大学院），川本裕大（東京大学），吉岡伸輔（東京大学）

16：20－16：35 演題番号 O1-7：

「グラウンドストロークにおいて身体全体を打撃方向に大きく移動させるという教示がラケットスピードに与える影響」

○川本裕大（東京大学），吉岡伸輔（東京大学）

16：35－16：50 演題番号 O1-8：

「テニスのリターンにおけるスピード及び回転数」

○柏木涼吾（鹿屋体育大学），村上俊祐（鹿屋体育大学），中村和樹（鹿屋体育大学）大澤啓亮（鹿屋体育大学），高橋仁大（鹿屋体育大学）

総会 司会：武田守弘（広島文化学園大学）

2日目：10月23日（日曜日）

9：00－ 受付 学会大会・テニス大会

（場所：北方圏生涯スポーツ研究センターエントランス）

一般研究発表 口頭発表③ 座長：黒田裕太（北翔大学）

（場所：北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室（6F））

9：30－9：45 演題番号 O1-9：

「高校部活動でのテニス指導研究 《硬式テニス未経験者へのフォアハンドストローク指導の実践と報告》」

○服部保弘（Kids Tennis Team KICKS）

9：45－10：00 演題番号 O1-10：

「大学運動部ガバナンス評価シートの開発と実践：日本を世界のカレッジスポーツにおけるガバナンス先導者へ」

○発田志音（慶應義塾大学），山本衛（東京弁護士会）

10：00－10：15 演題番号 O1-11：

「アバター共生テニス界の到来：その展望と法的課題」

○発田志音（慶應義塾大学）

10：15－10：30 演題番号 O1-12：

「海外プロテニスにみるアンチ・ドーピング規則違反事例」

○山本衛（東京弁護士会），発田志音（慶應義塾大学）

10：30－10：45 演題番号 O1-13：

「プロテニス選手の試合中における表情表出の特徴と得失点の関係」

○山口幸生(福岡大学スポーツ科学部)

一般研究発表 オンコート発表 座長：宮地弘太郎（大阪体育大学）

（場所：北方圏生涯スポーツ研究センター第三体育館（3F））

10：55－11：10 演題番号 C1：

「対話で進化するテニス」

○弓野憲一（弓野教育研究所），弓野スミ子（弓野教育研究所）

テニス大会 進行：岡村修平（大阪体育大学）

（場所：テニスコート）

11：20－12：20

※雨天の場合，中止.

表彰式 司会：黒田裕太（北翔大学）

（場所：テニスコート or 北方圏生涯スポーツ研究センター第三体育館（3F））

12：30－12：35 奨励賞・テニス大会入賞者の発表（テニス学会会長）

閉会式

（場所：テニスコート or 北方圏生涯スポーツ研究センター第三体育館（3F））

12：35－12：40

大会プログラム

○講演 1

『これまでのテニス学会とこれから』

梅林 薫 氏

(大阪体育大学スポーツ局局長)

○講演 2 およびオンコート

『テニピンがテニスのミライを創造する』

今井 茂樹氏

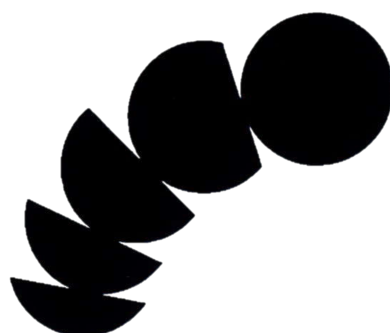
(山梨学院短期大学准教授)

○一般研究発表

(ポスター発表→口頭発表→オンコート発表)

学会企画

シンポジウム



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

講演 1

講演 1 司会：高橋仁大（鹿屋体育大学）

北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室（6F）

10：00－11：00

講師：梅林薫（大阪体育大学）

『これまでのテニス学会とこれから』

1989年、東京大学教養学部で第1回テニス研究会が開催されたのが、この学会の始まりである。その前年（1988年）の第39回日本体育学会が福島大学で開催され、体育方法専門領域でテニス関連の発表が行われている中、テニスを専門スポーツとする研究会を次年度から発足すると、現友末亮三会長からアナウンスがなされた。その当時のテニス関係者（研究者、コーチなど）が集まり、現場と研究を繋げていく方向で、この研究会を発展させていくことについて、集まった方々も賛同をし、大変盛り上がった雰囲気であったことが思い出される。そして、1994年の第6回大会よりテニス学会として名称が変更された。また、1996年9月には学術研究団体として登録された。設立時からの会員の推移については、当初200名から始まったところから1996年には650名ほどに、その後減少し、200名前後と落ち着いている。



この学会の特徴は、①現場と研究をつなげるテーマを主としている。②テニスの科学の学会誌を毎年発刊している。③オンコート発表を行っている。④テニス大会も行われている。⑤指導者セミナーも行われていた。ということであろうか。現在は若手研究者も多くなり、発表題目も多種にわたり、充実したものになってきている。

私は、当初からこの学会会員として活動させていただいていた。1981年4月に大阪体育大学に奉職し、専門分野のテニスのコーチングを中心に教育、研究、クラブ活動などに従事していた。当初は、試行錯誤の時期でもあり、丁度、この時期にテニス学会が発足したことになる。コーチングのレベルアップと同時に、（公財）日本テニス協会の医科学委員会の委員として活動、その後スポーツ科学委員会委員長（10年）として日本のテニスの強化に関わっていくことにもなる。この頃、ナショナルテニスセンター（当時、朝日生命久我山）を利用して、強化指定選手や地域のエリートジュニア選手の科学サポートなどを行い、2000年、JISS（国立スポーツ科学センター）が完成し、さらにエリート選手のスポーツ科学サポートが本格的に始まった。また、普及指導委員会、技術・サイエンス・タレント発掘委員会なども兼務しながら、日本のテニスの普及・強化、指導者育成などに関わらせていただいた。振り返ってみるとこのような流れであるが、近年は少子高齢化などにも影響され、日本のテニス界も変革の時期にきている。その上でテニス学会の役割もさらに大きなものとなるであろう。これまでの流れを基に、「今後のテニス学会のこれから」ということで、お話をしたいと考えている。

講演者プロフィール

梅林 薫 氏

経歴

1956年9月30日生まれ

1981年筑波大学大学院修士課程修了

1981年～2022年 大阪体育大学勤務、現在はスポーツ局長

大阪体育大学テニス部男子・女子監督

2007年～2021年 大阪体育大学トレーニング科学センター長、スポーツ科学センター長

2000年～2010年 日本テニス協会強化本部 スポーツ科学委員会委員長

2011年～2013年 日本テニス協会強化本部 技術・サイエンス・タレント発掘委員会副委員長

2013年～2021年 日本テニス協会医事委員会副委員長

現在 日本テニス協会医事委員会委員

関西テニス協会常務理事 強化・普及指導本部長

堺市テニス協会会長

日本テニス学会副会長

全日本学生テニス連盟部長監督会会長

関西学生テニス連盟副会長

主な業績、指導実績

主な業績、指導実績

「テニスの技術」遊戯社

「基礎のテニス」遊戯社

「新版 テニス指導教本」大修館書店

「ポロテリーのテニスコーチング」大修館書店

「教師をめざす学生のためのテニスの初心者指導」大修館書店

「体力トレーニングの理論と実際」大修館書店

主な資格

(公財)日本体育協会公認 テニスコーチ4 (マスターコーチ)

JATI (日本トレーニング指導者協会) 上級 (JATI-AATI)

.

.

講演 2

講演 2 司会：村上貴聡（東京理科大学） 北方圏生涯スポーツ研究センター大会議室（6F）
11：10－12：10

『テニピンがテニスのミライを創造する』

講演 2（オンコート）司会：村上俊祐（鹿屋体育大学） 北方圏生涯スポーツ研究センター第三体育館
（3F）13：00－14：00

『テニピンがテニスのミライを創造する』（オンコート）

講師：今井茂樹（山梨短期大学）

本シンポジウムでは、「『テニピン』がテニスのミライを創造する」のテーマのもと、「テニピン」が果たすテニス界への貢献について、登壇者の20年に渡る実践研究を基に「普及・育成・強化」の視点から話題提供します。具体的には、小学校体育への「普及」という「テニピン」の原点となる視点です。

日本テニス協会と連携した取り組みや、実践研究を通して明らかになったことをお示しします。次に、「育成・強化」の視点です。「テニピン」は小学校体育授業のなかで、「思考力・判断力・表現力」を養える効果的な教材だと提唱してきました。この視点は、テニス界においても援用できるものと思われます。日本のテニス界では、「スキルを身に付けてからでないとゲームはできない」といった考え方が今もなお存在しています。「テニピン」で重視していることは、まずは「ゲームの面白さに没頭する」ことです。没頭するからこそ、「技能」や「戦術」に必要感が生まれます。この必要感こそが、「自分事として問題解決に向かう最大の力」となるのではないのでしょうか。そして、「どこにどのようなボールを打てば得点できるのか」といった「状況判断」に目が向いていきます。こうした問題解決に向かっていく力は、テニスはもとより、人としてより豊かに生きていくうえで欠かせない能力であり、育成・強化の視点としても重視すべきことです。こうした「普及・育成・強化」の視点から「テニピン」の在り方を再検討し、皆様と「テニピン」が果たすテニス界への貢献について考えていきたいと思えます。



経歴：長野県立諏訪清陵高校卒業，東京学芸大学卒業，東京学芸大学大学院修了，東京学芸大学附属小金井小学校教諭，天津日本人学校教諭，山梨学院短期大学准教授（現在に至る）

学位・資格：修士（教育学），小学校専修免許，中学校保健体育専修免許，高等学校保健体育専修免許

社会的活動：

1.NHK スポーツパーク「松岡修造のテニスパーク」テニス型授業講習会講師，2019-2022.

2.UNIQLO life Wear day2021-テニスとサステナビリティ-with 錦織圭 講師・MC，2021.

論文：

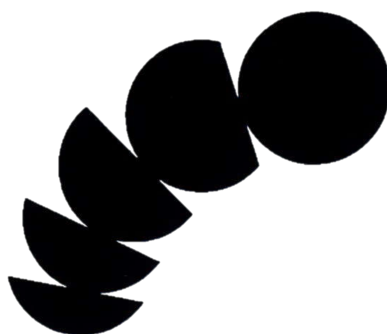
- 1.小学校体育の攻守一体ネット型ゲームにおける用具操作の技能習得に関する研究 - 「テニピン」経験有無の比較検討を通して-, 今井茂樹・佐藤善人, 日本教科教育学会誌, pp.13-25, 2022. (査読付)
- 2.小学校体育におけるテニス型ゲームの授業づくりに関する一考察－児童からみた「テニピン」の面白さと触球数及び得点数に着目して－, 今井茂樹, テニスの科学 29 巻 pp27-37, 2021 (査読付)

その他：

- 1.小学校体育新教材 個が輝く！「テニピン」の授業づくり, 今井茂樹, 東洋館出版, 2021.
- 2.個が輝く！テニス型授業－テニピンを教える指導者のためのガイドブック－第2版, 今井茂樹, 公益財団法人日本テニス協会, 2021.
- 3.小学校体育 全員参加の指導テクニック, 今井茂樹, 明治図書出版社, 2021.

一般研究発表

ポスター発表



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

テニスのグラウンドストロークにおける試合進行とパフォーマンスの関係
～Match simulation protocol を用いた実験的研究～

○村田宗紀(鹿屋体育大学), 内藤貴司(北海学園大学)

テニスは長時間の間欠運動であり、疲労とパフォーマンスの関係が議論されてきた。しかし、プレー中の血中乳酸濃度(BLa)は、先行研究に応じて異なる結果が報告されている(Bergeron et al., 1991; Smekal et al., 2001)。その要因として、試合進行に伴う疲労よりも、選手毎の打球フォームの違いによる影響が大きいことが考えられる。そこで、本研究では「打球動作後のBLaで被験者を分けた場合(低値群, 高値群)、高値群はボールの運動エネルギーに占める回転運動エネルギー(%Er)が大きくなる」、「試合進行は各生理指標に大きな影響を与えない」という仮説を立てた。被験者14名に、3セットマッチを模擬したMatch simulation protocolとHitting testを行わせ、ボールの力学的データと各種生理指標を測定した。その結果、低値群は高値群より%Erが大きく、セット進行は各生理指標に影響を与えなかった。すなわち、単純なストロークパフォーマンスは試合進行の影響を受けず、直前のポイントなどの短期的な運動強度の影響を強く受ける可能性がある。

テニス・女子ダブルスのゲームパフォーマンス分析

○高橋仁大(鹿屋体育大学), 岡村修平(大阪体育大学), 大澤啓亮(鹿屋体育大学),
村上俊祐(鹿屋体育大学)

近年、テニスのダブルスを対象としたゲームパフォーマンス分析が行われてきており、シングルスと比較してラリー数が少ないこと、サーバーのポイント取得数およびウィナー数が多いことなどが報告されている(Martinez-Gallego et al., 2020)。これらの報告は男子を対象としたものが多く、女子を対象としたものは少ない。男女のダブルスは異なるゲーム様相となっていることが予想されることから、本研究は女子を対象としたダブルスのゲームパフォーマンス分析を行い、ゲームパフォーマンス評価のための基礎的情報を得ることを目的とした。対象とした試合は世界ツアー大会、全日本学生大会、地方学生大会の各10試合、計30試合とした。全ての試合は3セットマッチで、ハードコートで行われたものとした。世界ツアー大会および全日本学生大会の映像はwebから収集し、地方学生大会の映像は会場で撮影した。各映像をSPLYZA Teams((株)SPLYZA)を用いて分析し、サーバーとレシーバーのポイント取得率やラリー数の分布、最終ショットの割合などを算出した。分析の結果、大会種別ごとに特徴があることが見受けられた。

中学生ソフトテニス競技者のコーチングにおける打球速度の目標設定

○松江拓(鹿屋体育大学大学院), 前田明(鹿屋体育大学)

ソフトテニスのグラウンドストロークにおいて、多くのプレイヤーが速度の高い打球を打つことを目標としている。しかし私のこれまでのコーチング経験では、自身の打球速度を把握している選手はごくわずかだった。その要因として、ソフトテニス界では打球速度を測定する機会が非常に限られていることが挙げられる。そこで本研究では、指導現場へ打球速度の目標設定を行うための資料を提供することを目的として、中学生競技者の打球速度データを収集した。対象は中学生男子144名とし、コントロール要素をできるだけ排除したMax条件と、予め決められたゾーンへ打球するControl条件の2条件でヒッティングテストを行った。その際スピードガンを用いて打球速度を計測した。その結果レギュラー群が非レギュラー群と比較し、打球速度が有意に高い値を示し($p=0.04$)、Max条件とControl条件の差も小さい値を示した。また、県大会上位経験者はMax条件における打球速度が136km/h以上を示しており、中学生の指導で目標値として設定できる可能性がある。以上のことから、中学生レベルにおいて打球速度はレギュラー選考に影響を及ぼしている可能性が示唆され、競技力の高さを示す一要因であることが示唆された。

自己効力感および他者効力感の検討 : 一高校生女子ソフトテニス選手を対象として一

○佐久間智央(日本大学), 高橋正則(日本大学)

スポーツ場面での自信については、「ある結果を生み出すために必要な行動を、どの程度うまく行うことができるか」という自己効力感(以下、SE, Bandura, 1977)が多く研究され、パフォーマンスとの関係について検討されてきた。近年、海外において、「特定の他者がある行動を行う能力に関する信念」である他者効力感(以下、OE, Lent and Lopez, 2002)が注目されている。ソフトテニスは、ダブルスをメインに試合が行われているため、SEに加え、OEも試合での実力発揮には重要な要素となると考える。そこで本研究では、SEとOEが競技経験年数やペア歴、そして主観的実力発揮度とどのような関係であるかを検討した。対象者は、ソフトテニス選手188名であった。試合前にソフトテニスのスキル、心理的パフォーマンスに関するSE、OEについて回答させた。試合終了後に、スキルおよび心理的パフォーマンスの実力発揮について回答させ、それぞれの相関係数を求めた。その結果、SEおよびOEは、自分およびパートナーの競技経験年数と有意な正の相関関係が認められた。一方、ペア歴については、SEおよびOEとの有意な相関関係は認められなかった。実力発揮度については、SEとの有意な正の相関関係が認められた。

スポーツ系大学の学生が望む「受講したいテニス授業」とは

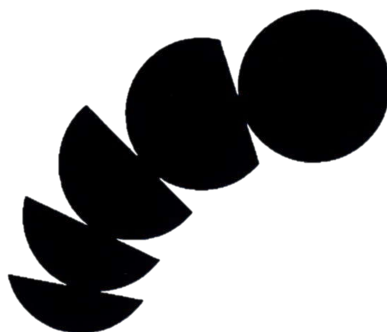
○武田守弘(広島文化学園大学)

筆者はこれまで、大学における効果的なテニス授業の方策を検討してきた。武田(2011)ではテニス初心者学生を対象に、目標到達型授業を展開し、学生の授業に対するモチベーションを上げ、主体的にスキル獲得に向けて取り組むよう働きかけていくことが可能であることが明らかとなった。また、武田(2012)では受講する学生が感じているテニスの「難しさ」を分析し、受講生によってその「難しさ」が異なることを明らかにし、「難しさ」を解消できるような授業展開を提案した。さらに、武田(2019)では各ショットにおいて技術が向上したことを示す基準段階を作成し、その基準をクリアしていくことで昇級していく制度「テニスチャレンジ」を導入することで、目標が明確になり練習しやすく自分の技術向上を実感できる、難しい課題や様々な課題にもチャレンジしようとする、対象者同士のコミュニケーションにより学習が促進できるなどの効果が示唆された。今回は、新型コロナウイルス感染症が拡大している現在の状況では、大学生のテニス授業に関する要望や考え方も変化している可能性があるため、本学スポーツ系学部に所属する学生231名にアンケート調査を行い、大学生が望むテニス授業を形式、時間、内容等から再検討することとした。また、内容面では、実現可能不可能に関わらず、画期的な意見を求めることで、今後の大学授業における新たな展開を模索することを目的としていた。これらは自由記述形式で得られたデータをもとに分析している。結果の詳細は当日発表する。

MEMO

一般研究発表

口頭発表



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

統計データとタグ付け動画を用いたアマチュアテニスコーチング手法

○渡邊泰行（慶應義塾大学）

本研究では、アマチュアテニス選手のシングルス試合の統計データを収集・分析・可視化し、課題のきっかけを絞り込むためにストローク失点時の選手が打ったコースとミスの種類に関するデータ項目を収集し、失点したポイントと動画を紐づけることで、選手に課題を考えさせ、課題の具体的なイメージをさせるコーチング支援システムを設計した。実証実験では本システムを活用する A 群と映像の比較映像のみを用いた B 群で課題を理解するきっかけとなった失点シーンを具体的イメージできているかを、アンケートを用いて検証を行った。検証の結果、本システムを活用した A 群の課題理解度が 86%、映像のみを活用した B 群が 39%であったことから、本システムの有用性が示唆された。また、統計データを見せることによって、選手自身が想像するミスの割合に対する認識のズレがあることが分かった。また統計データ表を選手に見せることで、選手が自己分析することで課題に気づくことができた結果が見受けられた。よって、選手の自己分析力を向上させる要因になることが示唆された。同時に本データが選手の調子を示すバロメーターになる可能性があることがインタビューで明らかになった。

機械学習を適用したサービスエース予測モデルの構築

○大澤啓亮（鹿屋体育大学），村上俊佑（鹿屋体育大学），岡村修平（大阪体育大学），
柏木涼吾（鹿屋体育大学），高橋仁大（鹿屋体育大学）

近年、テクノロジーの進化により選手の位置やボールの速度など、詳細なデータが取得できるようになった。テニスでは 2006 年よりライン判定に Hawk-Eye システムが導入され、ボールのスピードや回転数など詳細なデータが計測されるようになったが、データを活用した研究は多く見受けられない。そこで本研究では、取得したパフォーマンスデータを用いて、サービスエースになるか否かを予想する機械学習モデルを構築することを目的とした。分析の対象はオーストラリアンオープン男子シングルス 126 試合、18170 ポイントを対象とした。先行研究よりボールのバウンド座標やスピード、回転の種類、選手の身長などの項目を特徴量とした。分析の手法は Ace(1), In Play(0)とした分類二進木分析を適用し、4つのコース（デュース/アドバンテージサイド×センター/ワイド）でモデルを構築した。分析の結果、全てのコースで予測精度の高いモデルが得られた。特徴量の重要度について、デュースサイドのワイド以外の3つのコースでは「サイドラインからの距離」「サービススピード」の順であった。以上のことから、サービスエースの予測モデルが構築されたと共に、各コースにとって重要な特徴量が明らかになった。

ウェアラブルジャイロセンサーを用いた体幹部回旋動作評価方法の提案

○魚田尚吾（関西大学），丸谷賢弘（大阪大学大学院），川上諒（大阪大学大学院），
中田研（大阪大学大学院）

本研究の目的はグラウンドストローク中における簡易的な体幹部回旋動作評価方法を作成することであった。アマチュアの成人競技テニス選手20名を対象に、慣性センサー式9軸モーションセンサを第3胸椎（体幹上部）と上後腸骨棘間の仙骨（体幹下部）上に両面テープで固定した。ボールコントロール能力を評価するターゲットスキルテストを10試技行い、合計得点を算出した。サンプリング周波数200Hzで採取されたデータはButterworth low pass filter 10Hzで平滑化し、体幹上部と下部の最大角速度およびその出現時差、最大および最小の角加速度の5つを抽出した後、10試技の平均値と標準偏差を算出した。ターゲットスキルテストの得点を従属変数、前述の5つの平均値と標準偏差を独立変数として階層的重回帰分析を行った。その結果、体幹下部は最大角速度に関わらず急峻な加減速を伴わない方が、また毎試技の減速のばらつきが少ない方がターゲットを狙ったボールコントロール能力が高いという関係性が示された。本研究の方法はボールコントロール能力に関連する指標を評価指標とすることで、プレー中の体幹部回旋動作評価が可能となった。

模擬ゲーム中の打球データに基づく学生選手の課題の設定例

○村上俊祐（鹿屋体育大学），大澤啓亮（鹿屋体育大学大学院），岡村修平（大阪体育大学），
北村哲（びわこ成蹊スポーツ大学），高橋仁大（鹿屋体育大学）

村松ら（2010）は男子トップ選手におけるサービスのスピードと回転数から、トップ選手を目指すための目標値を提示しており、村上ら（2016）も様々なレベルの選手のサービスの打球データを収集し、競技レベルが高いほどスピードと回転数が高いことを明らかにしている。これらの結果は、打球スピードと回転数のデータが選手の技術を示す評価値として利用でき、かつ目指すレベルの目標値となり得ることを示している。こうした打球データをはじめとしたエビデンスを基にした指導を確立することは重要であり、本研究では大学生テニス選手5名（男子4名，女子1名）の模擬ゲーム中の打球データに基づく課題の設定例を提示する。具体的に課題を設定する手順として、模擬ゲームにおけるサービスのin率やポイント取得率といったスタッツと絡めた打球スピードおよび回転数といった打球データを選手にフィードバックし、指導者も交えたミーティングを実施した。また、補助的に打球データ情報が紐づいた映像の提供も行った。その結果、サービスにおける球種の選択や、打球スピードと回転数、スイングスピードの調整によるリスクマネジメントといった課題を設定することができた。

COVID-19の流行に伴うツアーの中断がプロテニスプレーヤーの試合統計に与えた影響

○石原暢(神戸大学), Nicolas Robin (Université des Antilles), 内藤貴司(北海学園大学),
村田宗紀(鹿屋体育大学), Miguel Crespo (International Tennis Federation)

COVID-19の流行は、東京オリンピック・パラリンピックなどの重要なスポーツイベントの延期を引き起こし、プロスポーツに大きな影響を及ぼした。プロテニスサーキットも例外ではなく、2020年4月から7月までツアーが中断となった。このようなCOVID-19の流行に伴うプロスポーツ活動の制限は、選手のパフォーマンスに悪影響を及ぼしていることが懸念されている。しかしながら、COVID-19の流行がプロテニスプレーヤーのパフォーマンスに与えた影響については未だ報告がない。本研究は、COVID-19の流行に伴うツアーの中断が、プロテニスプレーヤーの試合統計に与えた影響を調べることを目的とした。2019年から2021年に行われた21,499試合のデータを分析対象とした。分析の結果、ツアー中断前後でサービスゲームのポイント取得率が4.2%減少し、ブレイクポイントに直面する機会が7.4%増加していた。また、その影響は2021年のツアー終了時点でも完全には回復していなかった。本研究の結果から、COVID-19収束後にはサービスパフォーマンスの回復を目的としたトレーニングが重要であると考えられる。

ストロークの速さと精度のトレードオフ—ボール運動のばらつきとその落下位置への影響

○須藤佑介(東京大学大学院), 川本裕大(東京大学), 吉岡伸輔(東京大学)

速いストロークを打とうとすると精度は低下し、ミスが増えるがそれはいったいなぜだろうか?ボール運動の観点からはその要因は二つ考えられる。第一にボールの運動学的変数(速さや回転など、以下ボール変数)自体のばらつきが増加すること、第二に許されるボール変数の誤差範囲が小さくなってしまうことである。本研究ではそれぞれの要因がどの程度ショットの精度に影響しているかを検証した。大学生テニス選手を対象に三段階の速さでフォアハンドストロークを打たせる実験を行い、ボール変数と落下位置を測定した。測定の結果、ショットが速くなるほど落下位置の精度低下が確認された。速さによってボール変数のばらつきはほとんど変化しなかった。一方で、弾道シミュレーションを通じてボール変数の誤差の影響を定量したところ、速さによって大きな差が見られ、特に速度の仰角が著しく精度の違いを生み出していた。すなわち、ストロークの速さと正確性のトレードオフは身体的というよりもボールの飛翔特性という力学的な要因で生じていたと言える。したがって、ショットの精度を上げるためには、誤差に対してより頑健な軌道を用いることが強く推奨される。

グラウンドストロークにおいて身体全体を打撃方向に大きく移動させるという教示が
ラケットスピードに与える影響

○川本裕大（東京大学），吉岡伸輔（東京大学）

打撃動作の指導書において，身体の回転運動と併せて身体の並進運動が打具の加速に重要であるという記述が散見される．グラウンドストロークにおいて，並進運動を強調するために身体全体を打撃方向に大きく移動させるという教示がなされることがある．その教示により身体全体が加速して，全身の力学的エネルギーが増加することが期待されるが，それに伴ってラケットスピードが増加するかは明らかではない．そこで，身体全体を打撃方向に大きく移動させるという教示がラケットスピードに与える影響を明らかにすることを目的として研究を行った．熟練者にスクエアスタンスでの通常のグラウンドストロークと，身体全体を打撃方向に大きく移動させるという教示ありのグラウンドストロークを行わせた．教示ありの条件においてボールインパクト時の身体全体の力学的エネルギーは有意に大きかったが，打撃動作中にラケットになされた力学的仕事，およびその結果としてのインパクト時のラケットスピードは両条件で同程度であった．以上より，熟練者に対しては，身体全体を打撃方向に大きく移動させるという教示がラケットスピードに与える影響はわずかであることが明らかになった．

テニスのリターンにおけるスピード及び回転数

○柏木涼吾（鹿屋体育大学），村上俊祐（鹿屋体育大学），中村和樹（鹿屋体育大学）
大澤啓亮（鹿屋体育大学），高橋仁大（鹿屋体育大学）

テニスにおいて，サービスは最も重要なショット，リターンはその次に重要なショットであると言われている(Kriese, c., 1997)．近年，テニスのサービスのスピード及び回転数に関する研究は多く行われているが，リターンのスピード及び回転数に関する研究はあまり見受けられない．テニスにおいて，リターンはストロークと異なる技術であると言われており（日本テニス協会編），リターンの打球がストロークとどのように異なるのか，様々な状況においてリターンの打球がどのように変化しているのかを明らかにすることで，リターン技術向上のための新たな知見が得られるのではないかと考える．そこで本研究では，大学生テニス選手4名を対象に試合時のリターンのスピード及び回転数を測定し，状況別の打球の違いを明らかにすることを目的とした．その結果，1st サービスと2nd サービスに対するリターン及びリターンが入った時，入らなかった時でのスピード及び回転数においては違いが見られなかった．また，ストロークとリターンを比較したところ，フォアハンドリターンはフォアハンドストロークに比べて回転数が低くなる特徴が見られた．

高校部活動でのテニス指導研究 《硬式テニス未経験者へのフォアハンドストローク指導の実践と報告》

○服部保弘(Kids Tennis Team KICKS)

筆者は2020年に再任用教諭を終えるまで、公立高校のテニス部顧問として指導に当たってきた。ごく普通の高校では部員の大半が中学まで硬式テニス経験がない、またはソフトテニスの経験者である。そんな部員を高校3年生の4月に開催される高等学校総合体育大会予選までに勝ち上がることのできる選手に育てることが顧問としての私の目標であった。ここでは2016、2017年の再任用教諭2年間に在籍した愛知県立江南高等学校女子テニス部でのフォアハンドストロークの指導について報告する。試合に勝つためには相手に威力のあるボールを安定的に打ち続けることが必要である。特にフォアハンドストロークでは必須条件であると考えた。このテーマへのアプローチとして、下半身始動からの回転運動によるスイングを生み出すにはどうすればよいのかを考えた。一つの方法として回転運動を作り出すためにオープンスタンスで打たせることを試した。結果、成功と失敗を繰り返しながら、彼女たちが3年生となった高等学校総合体育大会地区予選団体戦では優勝することができた。彼女たちと歩んだ2年間の指導実践と成果、彼女たちの懸命の努力をお伝えする。

大学運動部ガバナンス評価シートの開発と実践：
日本を世界のカレッジスポーツにおけるガバナンス先導者へ

○発田志音(慶應義塾大学)、山本衛(東京弁護士会)

近年の日本スポーツ界は、ラグビーワールドカップやオリンピック競技大会など、メガスポーツ・イベントに関連する華やかな話題で盛り上がる機会が多かった。その一方で、大学アメリカンフットボール部での悪質タックル問題を筆頭に、大学運動部などにおける不祥事も相次いだ。そこで発表者らは2021年に、我が国の大学テニス部を対象にガバナンス調査を実施した。そして、その調査の結果をもとに全日本学生テニス連盟などと連携して大学テニス部向けの「ガバナンス評価シート」を開発した。本報告では、その調査結果の概要を世界各国のスポーツ団体のガバナンスと比較しながら紹介する。また、当該シートを実際に世界に先駆けて活用した日本の慶應義塾大学での実践事例について、関東理科大学硬式庭球連盟の加盟校に実施した2022年の新しい調査結果も踏まえつつ取り上げる。さらに、世界的な普及を目指して、国際テニス連盟などを通して当該シートを世界211カ国以上に配布する試みも行われた。そこで、米国などを中心に当該シートの国際的な評価はどのようなものであったかについても紹介する。

アバター共生テニス界の到来：その展望と法的課題

○発田志音（慶應義塾大学）

国立研究開発法人科学技術振興機構のムーンショット型研究開発事業では、「2050年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現」という目標を掲げている。具体的には、「誰もが自由に活躍できるアバター共生社会の実現」が目指されている。それは、サイボーグやアバターとして知られる技術を結集して高度に運用し、多様な形での社会参画を実現する点で生活様式を劇的に変革するものである。そしてテニス競技においても、そうしたアバターを活用することでトップ選手のプレー感覚や感情を他の選手に共有したり、遠隔地から複数の練習に参加できたりと、従来の指導法や競技の概念を完全に覆すことが可能となる。本発表では、そうしたアバターのテニスへの応用可能性と展望から、想定される新しい競技規則上・法律上の課題に至るまで網羅的に紹介し、来る「アバター共生テニス界」の未来像を描きたいと考えている。

海外プロテニスにみるアンチ・ドーピング規則違反事例

○山本衛（東京弁護士会）、発田志音（慶應義塾大学）

「アンチ・ドーピング」はスポーツの価値を保持するために重要である。ところが、世界ではアンチ・ドーピング規則違反が後を絶たない。テニス競技もアンチ・ドーピングと無縁ではなく、テニスにおけるアンチ・ドーピング規則違反の事例はニュース等でもしばしば散見される。ただ、テニスのアンチ・ドーピング規則違反の事例においては、ほとんどの事例でアンチ・ドーピング規則上の「意図的」「過誤または過失」の要件が争われており、故意のドーピングというよりは過失による禁止物質の検出が多いものと推察される。アンチ・ドーピング規則違反については法学的研究が進んでいるが、テニスに特化したものはなく、テニス選手向けに現場への提言をしたものは不見当である。そこで本研究は、テニス競技におけるアンチ・ドーピング規則違反の事例を分析しながら、選手活動に潜むリスクを紹介し、指導等において役立つ提言を行おうとするものである。

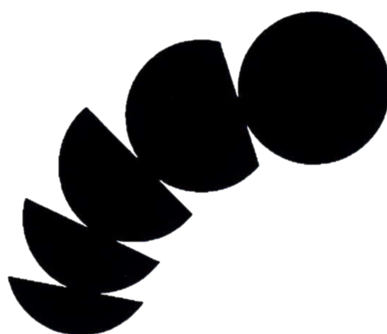
プロテニス選手の試合中における表情表出の特徴と得失点の関係

○山口幸生(福岡大学), 山口陸人 (University of Washington)

AI手法でプロテニス選手の試合中表情を分析し, 一流選手間で得点につながる感情表出は異なることが報告されている(Kovalchikら,2018).しかし, この客観的な表情分析手法は発展途上にあり, 市販分析ツールを用いた検証の可能性については未検討である.本研究は, 市販分析ツールを用い, 1)選手間でポイント間の表情表出は異なるか, 2)ポイント取得前と失点前の表情成分は異なるか, について事例的な検証を目的とした.分析対象は2020年ATPファイナルズにおけるルブレフ選手の2試合であった(対戦相手はティーム選手とチチパス選手).表情分析にはFaceReader Ver.7.1(Noldus社製)を用いた.本ツールでは, 喜び, 悲しみ, 怒り, 嫌悪, 驚き, 恐れ, 中立, 感情価, 覚醒度に関する表情成分の割合を分析可能である.分析の結果, 全選手において「中立」表情成分が70%前後であった.「喜び」「怒り」「驚き」表情成分の割合は選手間で異なっていた.マン・ホイットニーU検定の結果, ルブレフ選手は中立状態時に得点し($p<.05$), チチパス選手は感情価の低い状態で得点する($p<.05$)ことが明らかになった.

一 般 研 究 発 表

オンコート 発 表



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

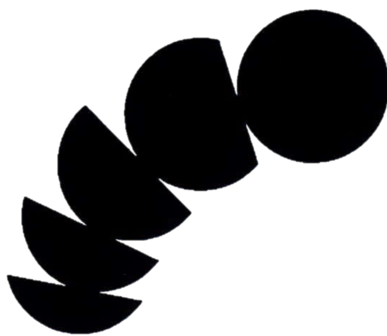
対話で進化するテニス

○弓野憲一(弓野教育研究所), 弓野スミ子(弓野教育研究所)

テニスの進化には, スキルの上達とともに, 知識やメンタリティーの拡大も欠かせない. 特にシニアになってからテニスを始めるプレイヤーが試合を楽しめる水準にまで到達するためには, この3者は欠かせない. この発表では, シニアのみならず, ジュニアが生涯にわたってテニスを進化させるために欠かせない, 「テニス学習における創り」を, 二人のテニス経験をもとに次のような話題を通じて紹介する.

- ①英国 KID の練習方法に驚愕.
- ②進化に必要な壁打ち練習.
- ③イメージを使った基礎スキルとゲームスキルの獲得.
- ④相手のバランスを崩す配球方法.
- ⑤トスを安定させてサーブ力をあげる.
- ⑥フットワーク力を拡大する.
- ⑦練習・試合日誌をつける.

企画プログラム開催履歴



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

日本テニス学会 企画プログラム開催履歴

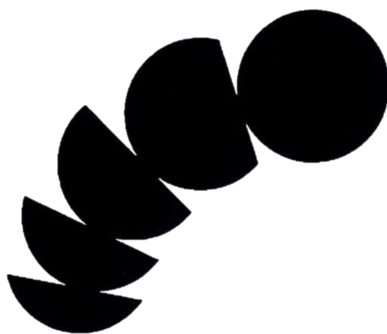
開催回	テーマ
第1回 平成10 東京大学教養学部	特別講演 ・日本のテニス、勝利への選択 宮下充正（東京大学） シンポジウム ・ジュニアのためのトレーニング 山本秀一・栗山節郎・海野孝・笹原英夫・荒井貞光・佐々岡潔 指導方法セミナー 講師：飯田藍
第2回 平成2/09 東京大学教養学部	指導方法セミナー ・技術評価法としてのテニスレイティングシステムの紹介 司会：佐藤雅幸（専修大学） 講師：松枝禮 シンポジウム ・メンタルトレーニングの理論と実際 児玉光雄（テニストレーニング科学センター） 西山征（園田学園女子大学） 高岡英夫（運動科学研究所） 白山正人（東京大学）
第3回 平成3/10 大阪体育大学	シンポジウム ・10年後のテニスの医・科学を考える 小浦猛志（宝塚テニスガーデン） 三浦朗（東北大学） 根本勇（日本女子体育大学） 辻田純三（兵庫医科大学） 指導方法セミナー 技術評価法としてのターゲットテニスの紹介 司会：佐藤雅幸（専修大学） 講師：湯浅正悟（JPTA）
第4回 平成4/09 吉田記念テニス研修センター	キーノート・シンポジウム 司会：三浦朗（東北大学） ・一地域における日本テニス研究会を媒介としたある啓蒙活動 塩野谷明（長岡技術科学大学） ・マラソン選手の活躍とトレーニング科学 小林寛道（東京大学） 指導方法セミナー ・吉田記念テニス研修センターの紹介 司会：佐藤雅弘（吉田記念テニス研修センター） 吉成啓子（白百合女子大学）
第5回 平成5/11 大阪体育大学	シンポジウム ・テニスにおける思考力と精神力 司会：中山厚生（天理大学） 坂本京一（GTSアカデミー） 佐藤雅幸（専修大学） 中山厚生（天理大学）
第6回 平成6/09 広島経済大学 兼 第1回アジアテニス 医・科学会議	シンポジウム 司会：磨井祥夫（広島大学） ・中華人民共和国における選手育成システム 郭漢琴（元中国女子テニスチーム監督・深川市テニス協会強化委員長） ・日本テニス選手の育成システム 浅沼道成（岩手大学）
第7回 平成7/12 スポーツ医・科学研究所	シンポジウム ・最新テニス事情 司会：辻田純三（兵庫医科大学） 川廷栄一（国際テニス連盟副会長） 松井秀治（勸スポーツ医・科学研究所所長） 指導方法セミナー ・テニス・スクールにおけるグランドストロークの指導法と矯正法 司会：三浦朗（広島女子大学） 演者：佐々章（旧日本プロテニス協会常務理事）
第8回 平成8/11 長岡市市民体育館	シンポジウム ・日本のテニス選手は世界でどこまで通用するか 司会：友末亮三（勸スポーツ医・科学研究所） 藤瀬武彦（新潟国際情報大学）・堀内昌一（亜細亜大学）・海野孝（宇都宮大学） 指導方法セミナー ・テニスパフォーマンス向上のためのスペシャルトレーニング 司会：藤本要（福島女子短期大学） 演者：大島伸洋（トレーニング科学研究所）
第9回 平成9/11 専修大学	シンポジウム 司会：佐藤雅幸（専修大学） ・テニス起源論を巡る謎について 稲垣正浩（日本体育大学） ・テニスでメンが食えるか？ 中川智文（テニスクラシック編集部）・丸山薫（JTAナショナルトレーニングセンター）・松原雄二（勸テニスクリエイション）・佐藤雅弘（JAMプランニング）
第10回 平成10/09 岩木山総合公園	コーチングクリニック ・科学的根拠に基づく効率的な指導法・練習法 田中伸明（慶應義塾大学） 大島伸洋（トレーニング科学研究所） 基調講演 ・テニスの科学への期待 友末亮三（勸スポーツ医科学研究所） シンポジウム ・テニス学会の将来展望 司会：村松憲（慶應義塾大学） 澁谷隆良（東洋英和女学院大学）・浅沼道成（岩手大学）・友末亮三（勸スポーツ医・科学研究所）

開催回	テーマ
第11回 平成11/11 白百合女子大学	講演 ・野球は科学を現場にどう生かしているか-野球選手のコンディション・チェック- 司会：三浦朗（県立広島女子大学） 講師：平野裕一（東京大学） シンポジウム ・ジュニア選手がトップを目指すにはどうすれば良いか 司会：岩月俊二（財吉田記念テニス研修センター） 西野真一（ナショナルトレーニングセンター専任コーチ） 岩月俊二（財吉田記念テニス研修センターフィットネスディレクター） 田村伸也（プリチアススポーツ契約プロ）
第12回 平成12/11 職業能力開発総合大学校	ワークショップ ・強くなるための練習法とトレーニング法 澁谷隆良（東京英和女学院大学） 大島伸洋（トレーニング科学研究所） 講演 ・リングを使用した動作のアウトプット・コントロールとサイバネティックスのトレーニング 飯島庸一（S-CHALLENGE Training Program Works代表） シンポジウム ・研究成果は現場でどう活用されているか 司会：友末亮三（安田女子大学） 高橋仁大（鹿屋体育大学） 道上静香（筑波大学） 田中伸明（東京電機大学）
第13回 平成13/11 こまつドーム	ワークショップ ・効果的なストロークの矯正法と指導法 友末亮三（安田女子大学） シンポジウム ・日本の選手育成システム 司会：大島伸洋（トレーニング科学研究所） 梅林薫（大阪体育大学） 田中伸明（東京電機大学） 大島伸洋（トレーニング科学研究所）
第14回 平成14/11 東京電機大学	講演 ・日本のテニスを考える一環境、組織、理念、そして指導法について- 司会：友末亮三（安田女子大学） 演者：堀内昌一（亜細亜大学）
第15回 平成15/11 東京都立短期大学 有明テニスの森公園	シンポジウム ・日本のジュニア選手育成の問題点を探る 司会：岩月俊二（北陸先端科学技術大学院大学） 宮尾英俊（名古屋高校テニス部監督） 笠原康樹（湘南スポーツセンター）
第16回 平成16/10 白百合女子大学	ワークショップ ・こうすれば上手くなる！テニス 友末亮三（安田女子大学） 特別講演 ・強くなりたいあなたに贈る100ぐらいの法則-トレーニング編- 大島伸洋（トレーニング科学研究所）
第17回 平成17/9 リョーコーテニスクラブ	試合観戦 ・ITF Women's Circuit \$10,000 Hiroshima ワークショップ ・日本一になるためのトレーニング 司会：山口光明（広島市立大学） 講師：大島伸洋（トレーニング科学研究） ・テニスにおける二軸動作について-実技編- 司会：杉山貴義（くらしき作陽大学） 友末亮三（安田女子大学） 細野朝海（安田女子大学） 小田伸午（京都大学） シンポジウム ・テニスにおける二軸動作について-理論編- 司会：大島伸洋（トレーニング科学研究所） 演者：小田伸午（京都大学）
第18回 平成18/10 羽鳥湖高原 レジャーの森テニスクラブ	シンポジウム ・テニスにおけるスポーツ科学の貢献-現場にどのような貢献がなされているか- コーディネーター：浅沼道成（岩手大学） 岩嶋孝夫（武蔵工業大学） 道上静香（滋賀大学） 平田大輔（専修大学） 吉田友佳（元テニスプレイヤー） ワークショップ ・動作分析・ゲーム分析ソフトをいかに使いこなすか！ 司会：佐藤雅幸（専修大学） 平田大輔（専修大学） 佐藤雅幸（専修大学） 平田大輔（専修大学） 佐藤周平（東海大学大学院） 吉成啓子（白百合女子大学） 田中伸明（東京電機大学） ・多人数における指導法 司会：浅沼道成（岩手大学） 講師：菊池真博（NPO法人テニスチャレンジ2020）
第19回 平成19/6 兵庫医科大学 兼 第8回テニスフォーラム	講演 ・コーチングを考える-サッカー協会の試みから- 講師：田島幸三（財団法人日本サッカー協会専務理事） オンコートセッション ・効果的なグランドストローク指導法-フットワーク指導を中心として- 講師：遠藤愛（筑波学院大学、元プロテニスプレイヤー） パネルディスカッション ・テニスにおけるスポーツ科学の貢献-その現状と今後に向けて- コーディネーター：浅沼道成（岩手大学） 井上直子（青山学院大学） 岩嶋孝夫（武蔵工業大学） 道上静香（滋賀大学） 田中伸明（東京電機大学）

開催回	テーマ
第20回 平成20/11 国立スポーツ科学センター ナショナルトレーニングセンター	20回記念大会 『今、テニスのできること』 基調講演 ・生涯スポーツとしてのテニス -そのあるべき姿- 宮下充正（日本テニス学会会長、東京大学名誉教授） 特別講演 ・今後スポーツが向き合っていくべきこと 吉田友佳 シンポジウム ・コーチにとって必要な資質とは コーディネーター：西村覚（島根大学） 堀場雅彦（ホリバイインターナショナルテニス） 丸山弘道（吉田記念テニス研修センター） 宮地弘太郎（関西国際大学） 浅沼道成（岩手大学） 対談 ・古武術からの発想：スポーツからロボットまで 司会：岩月俊二（北陸先端科学技術大学院大学） 甲野善紀（松籐館） 川副嘉彦（埼玉工業大学） 教育講演 ・JISSにおけるスポーツ科学的サポート 平野裕一（国立スポーツ科学センター）
第21回 平成21/12 那覇レクセンター	基調講演 ・沖縄での生涯スポーツとしてのテニスの普及 宮下充正（日本テニス学会会長、東京大学名誉教授、首都医学校長） シンポジウム ・沖縄から世界へ！ コーディネーター：高橋正則（日本大学） 玉城智（沖縄県テニス協会副理事長） 小高邦子（沖縄県立首里東高等学校） 小島弘之（株式会社ミュー） 澁谷隆良（東洋英和女学院大学） テニスクリニック ・沖縄のジュニアを対象とした効果的な指導法 司会：友末亮三（安田女子大学） 澁谷隆良（東洋英和女学院大学） 宮地弘太郎（関西国際大学） 友末亮三（安田女子大学）
第22回 平成22/12 明治大学	講演 ・日本のテニスの歴史を追い求めて 岡田邦子（財団法人日本テニス協会） シンポジウム ・テニスを科学するとは？ コーディネーター：高橋仁大（鹿屋体育大学） 前田明（鹿屋体育大学） 関子浩二（筑波大学） 道上静香（滋賀大学）
第23回 平成23/12 大阪体育大学	基調講演 ・50歳からの健康づくり -生き生きと暮らすために- 宮下充正（日本テニス学会会長） シンポジウム ・日本のテニスを世界のトップへ！ コーディネーター：浅沼道成（岩手大学） 沢松奈生子（元プロテニスプレーヤー） 宮地弘太郎（関西国際大学） 金重徹平（Game Changer） 梅林薫（大阪体育大学）
第24回 平成24/12 島根大学	シンポジウム ・テニスを科学するとは？・その2 コーディネーター：高橋仁大（鹿屋体育大学） 三浦朗（県立広島大学） 村松憲（慶應義塾大学） 梅林薫（大阪体育大学）
第25回 平成25/12 日本大学	特別講演 ・テニスとこころ 中村藍子（元プロテニスプレーヤー） シンポジウム ・テニスと心理サポート 関矢寛史（広島大学） 村上貴聡（東京理科大学） 田中伸明（明治大学） 永尾雄一（日本障がい者スポーツ協会）
第26回 平成26/12 東京理科大学	特別講演 ・世界で活躍するには！ 遠藤愛（東京経済大学、元プロテニスプレーヤー） シンポジウム ・テニスとソフトテニスの融合の可能性を探る！ 石井源信（東京工業大学名誉教授） 緒方貴浩（早稲田大学大学院） 武田守弘（福山平成大学）
第27回 平成27/12 鹿屋体育大学	特別講演① ・「スポーツの実践的研究」が市民権を得るためになすべきこと 山本正嘉（鹿屋体育大学） 特別講演② ・鹿屋発！新しいコンセプトの「鹿屋アスリート食堂」の展開—新しい産学官連携の形— 田畑綾美（株式会社オキス・管理栄養士）
第28回 平成28/6 岩手大学	特別講演 ・データで読む日本のテニス普及状況 澁谷茂樹（笹川スポーツ財団） シンポジウム ・日本のテニス環境を考える 西村 覚（島根大学） 富岡好平（エストテニスクラブ） 澁谷茂樹（笹川スポーツ財団）

<p>第29回 平成29/12 慶應義塾大学</p>	<p>特別講演 ・ テニスで学ぶ術 植田 実 (日本テニス協会強化本部本部長)</p> <p>シンポジウム ・ データ活用最前線 三橋大輔 (筑波大学) 池田 亮 (日本テニス協会強化本部) 坂井利彰 (慶應義塾大学) 植田 実 (日本テニス協会強化本部本部長)</p>
<p>第30回 平成30/6 専修大学</p>	<p>特別講演 ・ プロ野球で生き抜くために必要な事-Be Ready- 鈴木尚広(元読売ジャイアンツ・野球解説者)</p> <p>シンポジウム ・ 目指すべきよい指導とは？：それぞれの現場のHow to Coach 伊藤雅亮 (日本体育大学) 中嶋康博 (VIP・TOPインドアテニススクール) 横松尚志 (日本テニス協会) 宮地弘太郎 (大阪体育大学) 斎田悟司 (株式会社シグマックス 2004年アテネパラリンピック金メダル)</p> <p>企画セミナー ・ 心理カウンセラーから学ぶ話の聴き方・話し方 金子玲子 (専修大学/大学カウンセラー・臨床心理士)</p> <p>オンコートセミナー ・ ソフトテニス講習会 篠原秀典 (日本体育大学) 小林幸司 (ミズノ)</p>
<p>第31回 令和元/6 びわこ成蹊スポーツ大学</p>	<p>特別講演「国内国際大会の必要性について」 講師：堀内昌一(亜細亜大学)</p> <p>特別講演「日本卓球協会のこれまでの取り組みについて」 講師：前原正浩 ((公財) 日本卓球協会 副会長)</p> <p>パネルディスカッション「これからのコーチに求められるコーチングスキルについて」 伊藤リナ ((公財) 日本オリンピック委員会ナショナルコーチアカデミーアシスタントディレクター) 前原正浩 ((公財) 日本卓球協会 副会長)</p>
<p>第32回 令和2/6 北翔大学</p>	<p>新型コロナウイルス感染拡大のため中止</p>
<p>第33回 令和3/9 ウェブ開催</p>	<p>レクチャー「映像で見るテニスの歴史」 講師：後藤光将(明治大学)</p> <p>シンポジウム「テニス競技を支えるスポーツ科学」 進行：村上俊祐 (鹿屋体育大学)</p> <p>魚田尚吾 (関西大学) 黒田裕太 (北翔大学) 高橋正則 (日本大学)</p>

テニス大会歴代優勝者



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

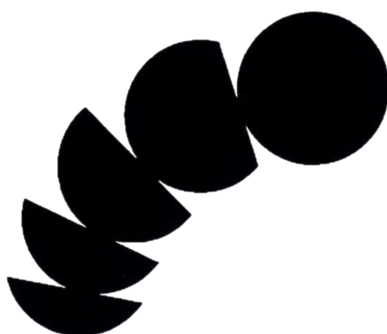
日本テニス学会 テニス大会 歴代優勝者

		Aクラス	Bクラス	45歳以上
第1回 1989	東京大学教養学部	大島伸洋 村本茂樹	浅沼道成 久保田秀明	
第2回 1990	東京大学教養学部	大森 豊 大森 肇	風間洋一 一瀬郁夫	
第3回 1991	大阪体育大学	高橋正則 村松 憲	前島芳雄 吉永裕樹	
第4回 1992	吉田記念 テニス研修センター	三浦 朗 前島芳雄	杉山貴義 水落文夫	小山秀哉 藤井恒夫
第5回 1993	大阪体育大学	足立長彦 大島伸洋	山内 武 串間敦朗	深見和男 平田 聰
第6回 1994	広島経済大学	雨天のため中止		
第7回 1995	スポーツ 医・科学研究所	宮尾英俊 佐藤陽治	西本整一 岩垂隆成	川副嘉彦 渡辺保雄
第8回 1996	長岡市市民体育館	村松 憲 康永哲守	平田 聰 平田大輔	小山秀哉 平田 聰
第9回 1997	専修大学	佐藤雅幸 小島京子		
第10回 1998	岩木山 総合公園体育館	藤原昌樹 石光孝次		池田耕吉 斉藤静夫
第11回 1999	白百合女子大学	*		
第12回 2000	職業能力開発 総合大学校	*		
第13回 2001	こまつドーム	*		
第14回 2002	東京電機大学	周東真理 村松 憲	コンソレ 川副嘉彦	
第15回 2003	東京都立短期大学 有明テニスの森公園	水野忠知 鈴木誠		
第16回 2004	白百合女子大学	荒天のため中止		
第17回 2005	リョーコーテニスクラブ	平田 聰 平田大輔		
第18回 2006	羽鳥湖レジーナの森 テニスクラブ	Aクラス	Bクラス	
		佐藤雅幸 佐藤周平	大山 肇 水野忠知	
第19回 2007	兵庫医科大学	池田耕吉 宮嶋慎治		
第20回 2008	ナショナルトレーニングセンター	チーム対抗戦 星美輝 石井誠 望月賢 池田耕吉 高橋博 川田祐也 森雅子		
第21回 2009	那覇レクセンター	山田龍彦 村上貴聡		

* は不明

		優勝	準優勝	3位
第22回 2010	明治大学	茨木千恵子	澁谷隆良	
第23回 2011	大阪体育大学	武田守弘	森雅子	霜島広樹
第24回 2012	島根大学	池田耕吉	平田聰	山本浩之 村上俊祐
第25回 2013	日本大学	佐藤茂 関矢寛史	神藤隆志 佐野左近	村上俊祐
第26回 2014	東京理科大学	池田耕吉 村上俊祐	黒田裕太 阪田俊輔	平田聰 高橋仁大
第27回 2015	鹿屋体育大学	粥川捺美	山本浩之	西島吉典
第28回 2016	岩手大学	平田 聰 北崎悦子	村上弘平 吉岡瑠維	
第29回 2017	慶應義塾大学	森嶋 修	北崎悦子	
第30回 2018	専修大学	板橋クリスト ファーマリオ 岩本 淳 村松 憲		
第31回 2019	びわこ成蹊スポーツ大学	西坂正雄 発田志音	箸本涼真 山中千紘	
第32回 2020	北翔大学	新型コロナウイルス感染拡大のため中止		
第33回 2021	ウェブ開催	学会がウェブ開催のためテニス大会を開催せず		

研究奨励賞歴代受賞者



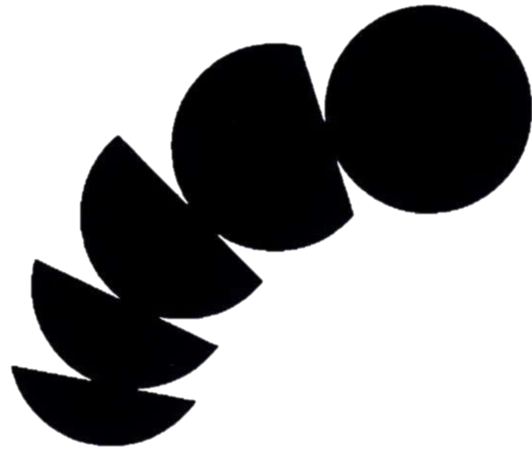
JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

日本テニス学会 研究奨励賞 歴代受賞者

第1回 平成10 東京大学教養学部	三浦 朗 東北大学	テニス選手の位置検出システム
第2回 平成20/09 東京大学教養学部	三宅 眞理 大阪教育大学	ジュニアの発育発達とショートテニス
第3回 平成3/10 大阪体育大学	大島 伸洋 中京大学	過去の運動クラブ経験がテニスの技術レベルに及ぼす影響
第4回 平成4/09 吉田記念テニス研修センター	高橋 正則 日本大学大学院	グラウンド・ストロークにおけるコースと球種の予測のための認知的技能について
第5回 平成5/11 大阪体育大学	三橋 大輔 筑波大学	一流テニス選手における大腿筋群の形態的特徴
第6回 平成6/09 広島経済大学 兼 第1回アジアテニス医・科学会議	ANNA.P.SKORODOUMOVA Russian State Academy of the Physical Culture	Loads in Competition
第7回 平成7/12 スポーツ医・科学研究所	田中 伸明 慶應義塾大学	大学テニスプレイヤーの集中力と競技力との関係
第8回 平成8/11 長岡市市民体育館	田辺 智 吉田記念テニス研修センター	テニス・サービスにおける上肢関節運動について
第9回 平成9/11 専修大学	鈴木 隆宏 テニスクリエーション	サービススイングにおける回旋動作へ導入するための練習方法の紹介
第10回 平成10/09 岩木山総合公園	道上 静香 筑波大学	世界一流選手のフォアハンド・ストロークについて -コース打ち分けの技術について-
第11回 平成11/11 白百合女子大学	高橋 仁大 鹿屋体育大学	世界トップ選手のダブルスのゲーム分析
第12回 平成12/11 職業能力開発総合大学校	平田 大輔 日本体育大学	テニスの学習に伴う認知的技能の変容に関する研究 -初心者について-
第13回 平成13/11 こまつドーム	有村 純太郎 鹿屋体育大学大学院	ビデオ機器を導入した練習法の開発
第14回 平成14/11 東京電機大学	武田 守弘 広島大学大学院	テニスのサービス予測に関する調査 -状況に基づく予測に着目して-
第15回 平成15/11 東京都立短期大学 有明テニスの森公園	徳田 寛子 岩手県テニス協会トレーニングセンター	テニスプレイヤーの経験年数と戦績によるフローの感覚差について
第16回 平成16/10 白百合女子大学	受賞資格対象者無	
第17回 平成17/9 リョーコーテニスクラブ	櫻井 真之介 日本大学大学院	コース予測のためのパターン認知のトレーニングがパフォーマンスに与える影響 -ソフトテニスのネットプレーを対象として-
第18回 平成18/10 羽島湖高原 レジーナの森テニスクラブ	佐藤 周平 東海大学大学院	テニスのサーブにおける模擬動作（フォーム）と実打との比較検討
第19回 平成19/6 兵庫医科大学 兼 第8回テニスフォーラム	宮地 弘太郎 関西国際大学	ラリーの主導権を握るためのショットに関する研究
第20回 平成20/11 国立スポーツ科学センター ナショナルトレーニングセンター	九鬼 まどか 早稲田大学大学院	クロススタンス打法によるフォアハンドストロークのキネマティクス
第21回 平成21/12 那覇レクセンター	岩月 猛泰 日本大学大学院	世界一流選手の対戦におけるサーフェスの違いからみたゲーム分析
第22回 平成22/12 明治大学	該当者無	
第23回 平成23/12 大阪体育大学	霜島 広樹 早稲田大学	テニス参加動機が観戦意欲へ与える影響に関する研究
第24回 平成24/12 島根大学	村田 宗紀 筑波大学大学院	硬式テニスサーブにおける肩関節内旋トルクと上腕の角加速度の関係
第25回 平成25/12 日本大学	野田 霞 グリーンヒルズインドアテニススクール	低年齢初心者における異種用具（低反発ボール）を活用した ストローク練習のアイデア -PLAY+STAYへの移行を想定したゴムボールの活用-

第26回 平成26/12 東京理科大学	大塚 絵梨奈 筑波大学大学院	テニスサーブにおけるトスに関するバイオメカニクスの研究 - トスのばらつきに着目して -
第27回 平成27/12 鹿屋体育大学	佐久間 智央 九州工業大学大学院	ソフトテニス競技における自己効力感および他者効力感とパフォーマンスとの関係
	石原 暢 北海道大学大学院	青年テニスプレーヤーにおけるシングルスゲーム前後の認知機能の変化と競技パフォーマンスの関係
第28回 平成28/6 岩手大学	野沢 絵梨 慶応義塾大学大学院	ライフスキルと集団凝集性がテニスの競技力に及ぼす影響 - 大学体育会テニス部員を対象にして -
	黒田 裕太 北翔大学	高強度活動後のグラウンドストローク精度の改良を目的とした練習方法の提案
第29回 平成29/12 慶応義塾大学	生関 文翔 安田女子短期大学	テニスとリズム系ダンスにおける良い動きの獲得と指導法の共通性について
	北崎 悦子 筑波大学大学院	テニスのラリーにおける個人戦術の指導の実践知に関する事例的研究 国際レベルで活躍した元女子テニス選手を指導したコーチの語りを手がかりに
第30回 平成30/6 専修大学	村上 俊祐 鹿屋体育大学	日本トップテニス選手のグラウンドストロークにおける打球データ分析：コースとポジションの違いに着目して
	発田 志音 東京大学教育学部附属中等教育学校	テニス審判員の参加動機と満足度に関する調査：活動頻度向上に関する提言
第31回 令和元/6 びわこ成蹊スポーツ大学	箸本 涼真 金沢大学	学校体育・部活動とテニスアカデミーのよりよいつながりを探して ：アデレードの事例から学ぶ
	山本 衛 東京弁護士会	テニス中の事故に伴う法的責任と現場の対応
第32回 令和2/6 北翔大学	新型コロナウイルス感染拡大のため中止	
第33回 令和3/9 ウェブ開催	田島 勇人 日本大学大学院	大学テニス選手の心理的競技能力とコンディショニングに対する意識がスポーツ傷害に与える影響

MEMO



JAPAN SOCIETY
ON TENNIS SCIENCE

第 34 回テニス学会事務局

北翔大学

〒069-8511 北海道江別市文京台 23 番地

スタッフ

黒田 裕太（北翔大学 生涯スポーツ学部 スポーツ教育学科 准教授）

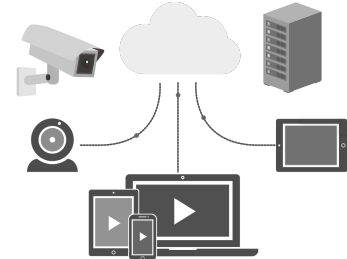
vosaic™ “指導力を可視化する”

映像とパフォーマンス分析でコーチ育成・ゲーム分析・授業研究を支援

クラウド型ビデオ分析ソフト「Vosaic」（ヴォザイク）はPCを選ばず、評価項目を自由に設定して分析できます。利用人数無制限で、研究や授業に最適です。

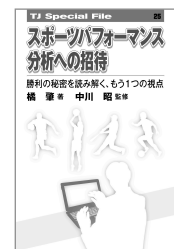


固定カメラの設置、ビデオの収録・配信システムの構築などもご相談ください。



執筆・出版でも活動中

- 著書「スポーツパフォーマンス分析への招待」（ブックハウス・エイチディ）
- オドノヒュー著・中川 昭監訳「スポーツパフォーマンス分析入門」（大修館書店）
- 月刊トレーニング・ジャーナル「実践・スポーツパフォーマンス分析」連載中



パフォーマンス分析テクノロジーの活用を通じてスポーツと教育に貢献
橘 図書教材 (代表: 橘 肇) 〒216-0005 川崎市宮前区土橋1-17-1-101
 TEL 090-4273-5179

パフォーマンス分析の情報は
<https://tachibanahajime.com>


Vosaic (ヴォザイク) の情報は
<https://www.vosaic.jp>

まだ見ぬ自分へ。

叶えてみたい夢は何だろう。
 4年後、どんな自分になりたいだろう。
 東海学園大学はその思いと向き合って
 新たな自分への成長を支援し、
 未来に生きる人間力を育みます。
 一人ひとりと向き合い、ともに進む。



TOKAI GAKUEN
UNIVERSITY

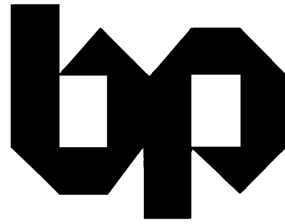
 あなたの力を、未来の力に!
東海学園大学
 TOKAI GAKUEN UNIVERSITY

お問い合わせ/入試広報課 TEL:052-801-1204
 [三好キャンパス] 〒470-0207 愛知県みよし市福谷町西ノ洞21番地233
 [名古屋キャンパス] 〒468-8514 名古屋市天白区中平二丁目901番地

最新情報はWebサイトに
ご確認ください。



書籍・学会誌・自分史



カタログ・社内報・伝票

[株]
文成印刷

代表取締役 林 幹雄

東京都杉並区方南1-4-1 ☎ 03-3322-4141 FAX 03-3322-4144

E-mail : bp@bunsei.com
URL <http://www.bunsei.com>